参考書誌研究・第二四号（一九八二・三）

いわゆるゾルゲ事件について

――その概要と参考文献の紹介――

田中　梓

《はじめに》

かつて、ラストボロフ事件というスパイ事件があった。昭和二九年一月、在日ソ連代表部のラストボロフ二等書記官がソ連国内の政変のためか突如アメリカに亡命、昭和二一年来日以来、日本人多数を使って外務省の重要機密情報や国連軍の活動情報をソ連に送っていたことを自白して明るみに出た事件である。当時戦後最大のスパイ事件とさわがれ、戦前のゾルゲ事件と比較された。

昨年一月、元陸将補の宮永幸久が現役の自衛官二名とともに、防衛関係の情報をソ連に流した事件があった。ふたたび戦後最大のスパイ事件といわれ、宮永らの情報を受けとっていた在日ソ連大使館付武官コズロフ大佐の所属するソ連情報機関GRUの前身が、かつてゾルゲが属していた赤軍第四本部（情報担当）であったことから、またゾルゲの名前がマスコミにあらわれた。

そして昨年九月、元日本共産党幹部伊藤律の突然の帰国によってゾルゲ事件は、またまた新聞や雑誌に大きくとり

上げられることになった。ゾルゲらの逮捕のきっかけが、訊問中に伊藤が洩らした北林ともの名前からだといわれてきたが、それがどの程度まで真実なのか、帰国後の伊藤の発言にまつところが大きかったため、ゾルゲ事件がまた人びとの話題となったわけである。

ゾルゲら組織のメンバーが逮捕されてからもう四〇年近くになろうとしている。ゾルゲ事件という名称はきいていても、その内容までくわしく知る人も次第に減ってきたことであろう。似たような事件や関係者が話題になると、新聞はその都度ゾルゲ事件の解説を書かなければならなくなった。またこの事件の内容が意外に知られていない理由の一つに、戦時中はもちろん、戦後になっても政治的な思惑などから事件の全貌が明るみに出たのが比較的遅かったことが挙げられよう。しかしその後、特に一九六〇年代以降、内外におけるゾルゲを中心とする事件関係の研究や資料の刊行が盛んになり、評価はまちまちながら、ようやく事件の内容を具さに知ることができるようになった。今ここに、それらの資料にもとづいて事件の概要を述べ、さまざまな文献の中から重要と思われるものを紹介してみたいと思う。

《事件の概要》

ゾルゲ事件とは、ロシア生れのドイツ人、リヒアルト・ゾルゲが一九三三年(昭和八年)九月、フランクフルター・ツァイツング紙の記者として来日、以後八年余にわたって近衛内閣のブレーンであった尾崎秀実らの協力を得て、日本とドイツの政治および軍事に関する最高機密情報を入手してソ連に通報、一九四一年(昭和一六年)一〇月検挙され、三年後に尾崎とともに処刑された事件である。今この事件のあらましについてもう少しくわしく述べてみよう。

1　主な登場人物

リヒアルト・ゾルゲは、一八九五年ロシアのカスピ海に沿ったバクーの近郊で、ドイツ人石油技師を父とし、ロシア人を母として生まれた。その後、一家はベルリン郊外に移住、ゾルゲの高校在学中に第一次大戦が勃発し、若いゾ

ルゲは大戦中三度出征して、三度負傷している。その間、高校卒業資格を得て、一九一六年ベルリン大学経済学部に入学、三度目の負傷をうけた頃からゾルゲは戦争を呪うようになり、特に入院中社会民主党員の医師や看護婦の影響をうけて、マルクス主義に関する文献を読みあさり、共産主義を信奉するようになった。戦後、大叔父フリードリッヒ・アルベルト・ゾルゲがマルクス、エンゲルスの友人であったことを知り、一そう共産主義運動に傾倒してゆくこととなる。この間、一九二〇年、ベルリン大学を卒業、同年ハンブルグ大学で政治学博士の学位を取得している。その後、大学の助手などをしながら、党活動に参加、一九二四年、フランクフルトで開かれた非合法共産主義大会で、ソ連のコミンテルン委員にコミンテルン行を勧誘されて訪ソ、一九二五年、コミンテルン情報局員となり、同年正式にソ連共産党員となった。その後、一九二九年までイギリスやスカンジナビア諸国で活動、その年ソ連赤軍第四本部（通称GRU＝情報部）に移る。そこでベルジン部長の指令により、偽装のためベルリンに赴いて、ゾチオロギッシェ・マガジン社の特派員となり、翌一九三〇年、中国へ派遣された。その後三年間、諜報機関を組織し、主として上海を舞台として活動、そこでアメリカ人記者アグネス・スメドレーを通じて尾崎秀実と知り合う。一九三三年モスクワに帰り、同年日本に派遣されることが決定した。そして偽装のため、ベルリンに行き、フランクフルター・ツァイツング紙とオランダのアムステルダム・ハンデルスブラット紙の特派員として契約、一方ナチス党に入党を申請（正式入党は渡日後）して、同年九月来日した。以後八年余の間、一九三五年に一度モスクワに帰国しているが、ラムゼイ機関とよばれる諜報団を組織、自身はドイツ大使館を中心に、また尾崎らの協力を得て、日本とドイツの政治および軍事上の機密情報を次々と入手して、ソ連に送りつづけ、一九四一年一〇月検挙された。

尾崎秀実は、岐阜の士族で漢学者であった秀真の次男として、一九〇一年（明治三四年）東京に生まれ、父が台湾日日新報の編集者であったため、幼少年期を台湾で過している。この時代、一家は台湾総督府民政長官であった後藤新平の庇護をうけており、秀実が後年朝日新聞に入社したのも後藤の口添えといわれている。やがて、一高、東大法学部を卒業、大学院在籍中、新人会や大森義太郎らの影響で共産主義に傾いていったようである。その後、朝日新聞社に入り、一九二八年（昭和三年）、大阪朝日の特派員として上海に派遣される。一九三〇年（昭和五年）、アメリカ共産党員の鬼頭銀一およびアグネス・スメドレーの紹介でゾルゲと知り合い、思想的に共鳴して、その活動に協力した。一九三二年（昭和七年）、大阪朝日に復帰、二年後、来日していたゾルゲとふたたび出会って旧交をあたため、

ラムゼイ機関のメンバーとして彼に情報を与えることを承諾した。一九三六年（昭和一一年）、アメリカのヨセミテで開かれた太平洋問題調査会第六回会議の日本代表の一員となって西園寺公一と知り合い、その関係で近衛文麿、風見章に接近、昭和研究会に入る。

一九三八年（昭和一三年）、近衛内閣の嘱託となり、新体制運動に参画することとなった。そして、近衛のブレーン・スタッフの集まりである朝飯会（後に水曜会となる）のメンバーとして活躍、翌年第一次近衛内閣総辞職の後は満鉄嘱託となる。この間、中国問題の専門家として論壇で活躍する一方、近衛グループから入手した情報をゾルゲに流していたといわれている。一九四一年（昭和一六年）一〇月ゾルゲに三日先立って逮捕され、三年後の一九四四年（昭和一九年）一一月ゾルゲとともに処刑された。

尾崎に次いでラムゼイ機関の重要なメンバーは、ブランコ・ド・ヴーケリッチであった。彼は一九〇四年、クロアチア（後ユーゴスラビアの一部となる）に、国王軍の陸軍中佐の息子として生まれた。一九二二年、ザグレブ大学建築学科に入学し、マルクス主義研究会に入る。その後、思想的要注意人物となり、同大学を中退、チェコスロバキアを経て、フランスに赴き、ソルボンヌ大学法科に入学、そこでも革命運動を指導したが、卒業後一時会社に就職する。一九三一年帰国入営、同年除隊、ふたたびパリにもどり、翌三二年ソ連の諜報組織に入った。その指令により、本人はフランスの週刊誌ラ・ヴューおよびユーゴスラビアの日刊紙ポリチカの記者、妻は体操教師として、一九三三年、ゾルゲの来日の半年ほど前に横浜に上陸した。以後、在京のフランス、イギリス、アメリカの各大使館、来日後その通信員となったフランスのアバス通信社などを舞台にして、重要な情報を入手してゾルゲに流した。一九四一年検挙され、四四年終身刑の判決をうけたが、翌四五年、終戦を待たず網走の刑務所で肺炎のため死亡した。

主要メンバーのもう一人の日本人宮城与徳は、ゾルゲが英語を話す助手がほしいということで、アメリカ共産党から派遣されてきた人物である。一九〇三年（明治三六年）沖縄に生まれた宮城は、師範学校を中退、先に渡米していた両親のもとへ行き、ロスアンゼルスのアーチスト・リーグに入所して絵画を学ぶ。その頃、フランスの革命運動に参加した画家ドーミエに心酔、無政府主義思想を抱くようになったが、次第に共産主義に傾く。サンディエゴ美術学校を首席で卒業後、プロレタリア美術協会に加入、一九三三年アメリカ共産党に所属、後述のゾルゲ・グループ逮捕のきっかけとなった北林ともとのつき合いもこの頃のことである。

一九三三年党の指令で来日、ラムゼイ機関の一員となり、ゾルゲと尾崎を再会させる役目を果す。また、得意の

絵で軍人の肖像画を描いて、軍の機密をきき出したり、アメリカ時代の仲間の協力を得たりして情報を入手、ゾルゲに与えていた。一九四一年一〇月検挙され、一九四三年八月、判決の直前獄中で病死する。

マックス・クラウゼンは一八九九年、ドイツのフーハムに生まれ、蹄鉄工をしながら夜間工高を卒業後、一九一八年世界大戦で通信隊に入って無線電信技術を習得、除隊後ふたたび蹄鉄工となる。一九二一年、ハンブルグで水夫となり、二七年にドイツ共産党に入党、船員細胞所属となった。翌二八年、コミンテルンから誘いをうけて訪ソ、同年赤軍第四本部から情報機関無電係として上海に派遣され、一九三一年諜報団の首脳となったゾルゲと知り合う。一九三三年モスクワ帰還を命ぜられ無線学校に入学、一九三五年五月赤軍第四本部から東京派遣を命ぜられ、同年一二月横浜着、直ちに上京してゾルゲと会い、ラムゼイ機関のメンバーとなる。一九三六年無線機の組立てを完了して発信を開始、四一年一〇月検挙されるまで、ゾルゲの情報をソ連に送信していた。

先にクラウゼンの中国滞在中に知り合って結婚したアンナ・クラウゼンは、渡日後は機関の伝書使として、たびたび上海に派遣され、官憲の目をくぐって情報をソ連に伝達する役目を果している。なお、マックスは一九四一年一〇月一八日、アンナは同年一一月一七日に逮捕され、それぞれ終身刑および懲役三年の判決をうけたが、終戦により一九四五年一〇月八日釈放された。

以上の主要なメンバーに、意識的にあるいは無意識で情報を与えてその活動を助けた人たちについては、後述の「組織の活動」、「その成果」および「カタストロフ」の各項で触れることとする。

2　組織の活動

ゾルゲをリーダーとするこの組織は、彼の名前のイニシアルを暗号化してラムゼイ機関とよばれた。機関の組織化は、一九三三年九月のゾルゲの横浜上陸にはじまる。これより先、国際共産主義機関であるコミンテルンは、赤軍第四本部の命令で、その二人の秘密要員をゾルゲの助手として東京へ送ることとなった。二人とはヴーケリッチと宮城であった。ヴーケリッチは、前記のラ・ヴュー誌などの記者としてゾルゲ来日の半年前、一九三三年二月に東京に着任、また宮城はゾルゲより一カ月ほど遅れて東京に現われている。そして、東京に居を構えたゾルゲを中心に、このヴーケリッチ、宮城の二人に無電技師ベルンハルト（クラウゼンの前任者）を加えた組織が、そろそろ組織活動に入

っていったのである。

しかし、ゾルゲは直ちに尾崎と連絡して仲間に入れるような軽卒な男ではなかった。二年近く離れていた尾崎が、上海時代の思想と情熱をまだ持っているかどうかという危惧もあったろうし、諜報機関の長としての用心深さもあったのであろう。翌一九三四年九月になって、ようやく宮城を介して、当時大阪朝日新聞社にいた尾崎と再会、彼が上海時代と変らぬ心境にあることを知り、ラムゼイ機関に協力する旨の了承を得た。一九三五年五月、ゾルゲの依頼により、やる気のないベルンハルトに代り、モスクワからクラウゼンが東京に派遣されてゾルゲの組織に加わって、ここにラムゼイ機関の主要メンバー五人が出揃い、以後一九四一年一〇月全員が逮捕されるまで、ゾルゲの指令の下に一糸乱れぬチーム・ワークで、主として日本とドイツに関する機密情報をソ連に送りつづけたのである。

ゾルゲ自身が入手した情報の出所はドイツ大使館と在日ドイツ人社会であった。彼はこのように身分を怪しまれずに、ドイツ人の社会に入りこみ、かつその信用を得るためにあらゆる努力を払っている。先ず渡日前、赤軍第四本部の勧めで、フランクフルター・ツァイツング紙とアムステルダム・ハンデルスブラット紙の特派員となる契約をしている。もっとも一説では、前者は寄稿を約しただけで、正式の特派員となったのは来日後二、三年たってからだといわれている。また、すでに中国滞在時代に得たアジアに関する知識に加え、日本についての知識を得るために猛烈に勉強した。そして短期間のうちに、在日ドイツ人の間で、中国ばかりでなく日本の国情について彼の右に出るものがないほどの権威となった。これは彼の優秀な頭脳と、逮捕のとき日本に関する図書一、〇〇〇冊以上を持っていたというその勉強ぶりの賜であったのであろう。

ゾルゲが来日後、ディルクセン大使をはじめとする大使館員の信頼を得るようになるのには大して時間がかからなかった。特に当時ナチス陸軍の駐在武官補佐官として名古屋に派遣されていたオットー中佐には、その夫人が若い頃のゾルゲの知己であったということもあって、最初から信頼を得ていたようである。ゾルゲは自分の諜報網でさぐった情報の一部をオットーに与えたり、彼に代って報告を書いてやったりした。このためにオットーは次第にドイツ本国でその手腕をみとめられるようになり、武官補佐官から駐在武官に、更に駐日大使へととんとん拍子に出世することができた。

大使になったオットーは、その立身出世の恩人ともいうべきゾルゲを大使館の私設情報官に任命するほど彼を信頼した。こうしてゾルゲは大使館の公文書を自由に見たり、オットーら高官と日独の軍事・外交問題について意見を交換することができた。大使館付のゲシュタポ（ナチスの政

治警察）の大佐まで、ゾルゲを信用し、常に彼と意見を交換していたという。こうなるとドイツ大使館もゾルゲにかかっては赤子の手をひねるようなもので、日独関係や独ソ関係の外交情報がきわめて容易に彼の手に入っていった。ゾルゲがスパイ容疑で検挙されたとき、オットー大使をはじめとするドイツ大使館が周章狼狽したのも当然であった。

尾崎の主な情報源は、もちろん新聞記者としての通常のそれもあったであろうが、より重要なものは近衛公のブレーン・トラストのグループであった。尾崎がこのグループに接近するようになったのは、前述のように西園寺公一や犬養健と知り合ったこと、一高時代の友人牛場友彦が近衛の秘書官を勤めていたことなどであった。彼らを通じて、第一次近衛内閣の書記官長風見章や近衛の側近で昭和研究会を主宰していた後藤隆之助らとも知り合い、近衛公のブレーンの情報交換の場であった朝飯会（後の水曜会）や近衛に政策を具申し、その理論づけを行った昭和研究会に加わるようになった。

中国問題の専門家としてのすぐれた識見とその適切な発言によって、尾崎は次第にこれらグループの重要なメンバーとなり、近衛の信頼を得るようになった。こうなれば、ドイツ大使館におけるゾルゲの場合と同様、特に近衛の三次にわたる首相在任中は、国の内外政策の最高機密や御前会議の内容などに関する情報は、きわめてたやすく尾崎の耳に入ったわけである。

このほか尾崎には上海時代に知り合い、ともにゾルゲやスメドレーの活動に協力した仲間がいた。当時、中国共産党の指導の下に日支闘争同盟を組織し、反戦活動を行っていた川合貞吉をはじめ、支那問題研究所の船越寿雄、満州日日新聞の河村好雄、水野成らで、尾崎は彼らの提供するいろいろな情報を、自ら得た情報とつき合わせて分析検討し、ゾルゲに送っていたといわれている。

ヴーケリッチの情報入手活動はおおむね合法的で、スパイ小説にあるようなスリルやサスペンスもない、新聞記者として可能な範囲を出なかったものと夫人山崎淑子が戦後語っている。しかし、ヴーケリッチは語学の天才で、母国語のクロアチア語のほか、ラテン語、ドイツ語、フランス語、英語、ハンガリー語、イタリア語、チェコ語を自由にあやつり、新聞記者として日本の同盟通信社やロイター通信社のジェームス・コックス（一九四〇年検挙されて自殺）ら反枢軸国系の外国特派員たちからひろく情報を得ていた。またきわめて社交上手な彼は、フランス、イギリス、アメリカ等の大使館にも顔が広く、これらからも情報を得ていたという。

ヴーケリッチは写真の技術にも通じ、暗室や接写機も自分でつくって、組織が入手した情報の写真複製はすべて彼

が行っていた。また、クラウゼンの無電発信に自分の部屋を提供したり、その発信の操作を助けたり、情報収集の面だけでなく、その伝達面で果した役割は大きい。

宮城は得意の絵を生かして軍人の肖像画を描くことで彼らに近づき、軍の重要な機密をきき出したといわれているが、他の情報源、すなわちアメリカ共産党時代の仲間で帰国後裁縫学校の教師をしていた北林とも、元陸軍下士官の小代好信、医師安田徳太郎、元日本共産党員田口小源太、同九津見房子、農業問題研究家の山名正実らからも情報を得ていた。これらの情報は宮城のところで検討され、アメリカ時代の仲間秋山幸治の協力を得て翻訳の上、ゾルゲのもとに送られていた。

ゾルゲのグループの活動の中で、クラウゼン夫妻の果した役割も小さなものではなかった。マックスの無電技師としての腕前は大したもので、モスクワでは「彼はきゅうすの中でラジオを組立て、そのきゅうすでお茶がわかせる男だ」といわれ、中国では、機材の不足に悩みながらもあちこちで買い揃え、立派な無線機をつくり上げたという。この腕前を見込まれ、無能な前任者に代り、わざわざゾルゲがモスクワからよびよせただけあって、一九三五年一二月彼の来日後は無線による送受信はきわめて順調であった。怪しい電波が海外に向けて発信されていることがキャッチされながらも、遂に最後まで日本側に出所をつきとめられなかったのは、発信所を次から次へと変えていった彼の優秀な無電技術のためだと思われる。

アンナ・クラウゼンのゾルゲ・グループの中での役割は、伝書使として上海、香港などに情報・資料を運ぶことであった。長らく上海に居住したことのある彼女なので、やや頻繁に往復しても怪しまれることも少かろうということで、この役をうけもったのであるが、危険なことも何度かあったという。

3　その成果

八年余にわたるラムゼイ機関の活動がいかに見事な成果を挙げたかということは、「もはや日本から盗むべき機密はない」という訊問中のゾルゲの言葉からうかがわれよう。さて、その成果、すなわち日本から送られた機密情報をどの程度まで、ソ連当局がその外交・軍事政策にとり入れたかということは正確にはわからないが、ソ連の政策に当然影響を与え得たと思われるような重要性をもつものをいくつか挙げてみよう。

一九三三年日本に派遣されたゾルゲの任務は、一口に言えば、「満州事変以後の日本の対ソ政策を観察し、対ソ攻

撃計画がどう動いてゆくかを綿密に研究し、それを報告する」ことであった。この日本の対ソ政策をさぐるための具体的かつ補足的なテーマ、たとえば、ソ連攻撃のおそれのある日本陸軍と航空部隊の改編と増強状況、ヒトラーの政権獲得後の日独関係、日本の対華政策、日本の対米英関係、日本の対外政策決定に果す軍部の役割、日本の戦時経済拡張問題などがゾルゲらの研究、情報収集の対象となった。ゾルゲは、モスクワ本部の指令を拡大解釈し、尾崎やヴーケリッチにその社会的地位と影響力を利用して、日本の対ソ攻撃を阻止するための言論活動をそれとなく行うことを許している。

一九三一年以降、一九三五年にかけて日本の満州攻略が続き、ソ連はその権益を持つ東支鉄道をかかえているため、日本の北進、対ソ行動には重大な関心を抱いていた。この時期、ゾルゲは尾崎や宮城の報告、あるいはディルクセン大使から得た情報にもとづいて、日本の対ソ政策を分析し、一九三五年、日本政府がソ連を攻撃対象とする北進政策よりも、中国問題に重点をおいていることをモスクワに報告している。

ゾルゲがその名を挙げたのは、一九三六年二月に起った二・二六事件のときである。ゾルゲはドイツ大使館のオットー、ヴェネッカ両武官から日本の陸海軍の情報を得た上、また尾崎や宮城からもくわしいデータを得て、他の大使館よりすぐれた見解を述べて、大使やオットー武官らの信任を得た。また彼はこのときの情報をまとめて、「東京における軍隊の叛乱」と題し、ドイツの雑誌「ゲオポリティーク」に発表した。これがモスクワでプラウダに転載され、モスクワにおいて、ゾルゲのもたらす情報の正確さがみとめられる一因となった。また同年一一月締結された日独防共協定については、ドイツ大使館の有力筋から事前にその内容をつかみ、またドイツは軍事同盟を欲していたが、日本がソ連と事を構えることを欲せず、防共協定に終った事情をモスクワに報告している。

一九三七年七月日華事変の勃発以降、日本の対華工作および日本軍の動員状況についての情報や、また日本が華北問題の解決をあせって失敗し、戦争は全面的に拡大するという尾崎の見解をモスクワに伝えている。

一九三九年夏、ノモンハン事件が起った。日ソの全面戦争に発展するのではないかと思ったものが多かったが、ゾルゲは、関東軍の対ソ開戦論に対し軍中央部がブレーキをかけていることを尾崎や宮城からきき、アバス通信社の特派員として現地に従軍したヴーケリッチからも日本軍の状況をきいて、日本政府にはこの事件を本格的な戦争に発展させる計画のないことをモスクワに打電し、またこの際、優秀なソ連機械化部隊と航空兵力で一気に日本軍を圧倒すべきことを具申したともいわれている。事件後、完敗にこ

りた日本軍がソ満国境にドイツを手本とした装甲師団を増強していることを、ドイツ大使館と宮城からきき出して、これもモスクワに報告している。

また同じ年の八月に、「欧州の天地は複雑怪奇」なる言葉を残して平沼内閣が倒れる原因となったあの突然の独ソ不可侵条約の締結も、ドイツ大使館内の秘密文書やオットーらがもらす情報によって、その交渉過程や内容を二週間前にスクープしている。また以前から平沼内閣の懸案で、この不可侵条約で中断された日独軍事同盟は、翌一九四〇年に日独伊三国同盟として結実するのであるが、ドイツ側草案はオットーの命をうけてゾルゲが書いたといわれるほどであるから、その交渉過程や両国政府の動きがすべて逐一モスクワに報告されたことはいうまでもない。

一九四〇年になるとヨーロッパ戦線の動きが活発になり、日独伊三国同盟締結後の日本の動向はソ連の強い関心のまととなった。この年のはじめ、ゾルゲは日本の兵器、飛行機、自動車および鉄鋼の生産能力について、ドイツ大使館と宮城の情報をもとに報告を送り、以後逐次それを訂正もしくは補足する報告を行っている。

ラムゼイ機関の活躍のクライマックスは一九四一年にやってくる。先ず同年六月二二日にはじまるドイツのソ連攻撃、いわゆる「バルバロッサ作戦」の見事なスクープがある。この頃オットー大使の要請で大使館の私設情報官ともいうべきポストにあったゾルゲは、館内のすべての情報に自由に接することができた。このようなゾルゲにとって、本国外務省の動きは手にとるようにわかったし、彼を信用していた大使館の陸海軍両武官がもらすドイツ軍部の作戦計画の一部をたやすくキャッチすることもできた。このように大使館を舞台としたゾルゲの活躍はすさまじく、作戦開始の約一ヵ月前の五月二一日、ドイツは一七〇乃至一九〇個の師団を東部国境に集結し、六月二〇日頃の予定で一斉攻撃を開始するとモスクワに報告しているが、この情報はたった一、二日の誤差があっただけで的中している。

西からドイツ軍の破竹の進撃をうけたソ連にとって、最もほしい情報はソ満国境の日本軍の動向についてであった。したがってこの日以降、ゾルゲらの活動は日本軍が東からソ連攻撃を開始するかどうかという日本側の動きをさぐることに集中された。ソ連赤軍にとって、日本軍が出てくるかこないかは、極東軍を西部に移動してドイツの猛攻を防ぐことができるか否かにかかっていたのである。

しかし、ゾルゲらにとってこれはなかなか回答の出せない問題であった。オットー大使は、ソ連極東軍を東部にくぎづけにしようとして、日本が戦争を開始するよう盛んに日本政府を説いた。しかし日本政府の態度はなかなか決せず、尾崎がもたらした七月二日の御前会議の情報も、仏印に南進してその基地を確保するという政策を決定したと同

時に、日ソ中立条約を維持しつつ、日ソ戦の可能性をも捨てていないというもので、その頃ゾルゲはそのようなあいまいさの残る報告をしている。七月末、前記御前会議で決定した方針にもとづき、北に二五万、南に三五万、内地に四〇万、計一〇〇万の兵力が動員されたことが、尾崎および宮城の情報でわかったが、この段階でもまだまだ対ソ攻撃を行うかどうかははっきりとつかめなかった。

この頃から日本軍の南部仏印進駐により、日米関係が悪化の一途をたどり、対日経済封鎖がとられて、日本に対する包囲攻勢が次第に強まっていった。八月、ドイツ大使館と宮城からの情報にもとづき、日本の戦力を推定する上で最も重要な事項の一つである石油の保有量につき、海軍は二年分、陸軍は一年半分、民間は半年分とゾルゲはモスクワに報告している。またこの頃、ドイツのソ連攻撃が停滞し、日本の政界上層部にソ連の早期崩壊はむずかしいという意見が有力になった。このことは、南進策と対米悪化などと相まって、今年中に日本の対ソ攻勢はなかろうという判断をゾルゲたちに持たせることとなった。尾崎は九月に満鉄の大連本社に出張、その機会に七月動員以後の在満日本軍の動静を調査して、対ソ戦の可能性のないことを確認することができた。また尾崎がその頃近衛の側近を通して得た海軍側の情報から、南進政策がとられることがはっきりした。ゾルゲは一〇月に入ると、関東軍がシベリア国境を越えてソ連を攻撃する危険はないと報告している。こうして、以後彼らの目はもっぱら日米交渉に注がれることとなった。

この独ソ開戦以降の日本の対ソ政策については、ゾルゲら組織の動きはもはや諜報機関のそれ以上のものであった。モスクワの赤軍第四本部は、ゾルゲたちが情報活動以外の政治的な宣伝や工作を行うことを禁じていたが、この日本の対ソ攻撃がはじまるかどうかという時点において、彼らはその原則をふみこえた。尾崎は日ソ戦を避けたいという強い願いから、近衛グループの中で強硬に日ソ開戦反対を唱え、日本の膨張を有利に展開するには南進以外にはないという論拠で政治工作を行っている。そしてモスクワの制限にもかかわらず、ゾルゲはこれを許したばかりでなく、彼自身もドイツ大使館や日本人の友人にそれとなく日本の対ソ戦に反対する意見を述べている。このゾルゲ・尾崎の政治工作がどれほど現実の国策決定に影響を与えたかはわからないし、政策決定のメカニズムからみて、一人、二人の人間の力など小さなものであるが、結果からみて、ゾルゲや尾崎の思いどおりになったわけである。

この「日ソ戦わず」の報告の後、日米関係に注目したラムゼイ機関は、一〇月中旬までに対米交渉の成果が上らなければ、日本は対米開戦にふみ切るという情報を得てこれを報告している。なお一説によれば、日本の真珠湾奇襲計

画の情報すら入手、この報告をうけたスターリンがルーズベルトに警告したが、ルーズベルトのスターリンへの不信からかこれを無視して、緒戦の大損害を被ったといわれている。このあたりの真偽はさだかでないが、もし本当だとすれば、ラムゼイ機関の日本における戦績はまさにパーフェクト・ゲームの勝利といえるものであろう。

4　カタストロフ

ゾルゲらの組織が一九三三年に活動を開始してから、八年以上にわたって日本の防諜機関にその存在を気づかれなかったことは実に驚嘆すべきことである。もちろん名にし負う日本の特高警察のこと、ようやく一九四〇年頃になると、組織としてではなかったが、メンバー個々に対して疑惑の目を注ぐようになった。すなわち、ゾルゲらのカタストロフの兆しがようやくみえはじめたのである。先ずゾルゲについていえば、一九三三年来日以来、彼がドイツ大使館内で得た絶大な信用のため、外国人に対して過度に警戒の目を光らす日本の警察や憲兵にもなかなかしっぽをつかまれるようなことはなかった。ドイツ出発前ナチスの目をかいくぐり、また、日本に来てからナチス党員となることに成功、以後数年間全く怪しまれることはなかったし、彼も自信を持っていたようだ。しかし、周到な偽装もやはり完全なものではなく、ゾルゲの身辺にも危機は次第に迫っていった。

一九四一年、ナチスの秘密機関長シェレンベルグは国家公安部とゲシュタポでゾルゲに関する書類を一読、ゾルゲが元共産党員だったとは断定できないが、少くともシンパであったことをつきとめた。そして、東京におけるゲシュタポの代表マイジンガーにゾルゲの前歴をうちあけ、東京で徹底的に調べ上げるよう依頼した。ドイツ大使館の高い信望とナチスの有力筋とのつながりを持つゾルゲのこと、彼がくさいという噂は常に消され、名うての殺し屋といわれたマイジンガーの報告でさえも好ましい人物というものであった。ところが、このマイジンガーへの調査依頼が、彼の不用意な発言で日本側に洩れたことから、東京の外人要注意人物に対して神経をとがらせていた特高警察の監視の目がゾルゲに向けられることになったといわれている。そして、翌一九四一年春になると、麻布のゾルゲの住居に近い鳥居坂署の刑事が彼の家に出入する人物を監視するようになった。

一方、尾崎はどうか。すでに昭和一四年、尾崎は内閣嘱託を辞め、満鉄の嘱託に転じて、近衛からやや遠ざかっていたが、その頃から昭和研究会や昭和塾にアカがいるとい

う噂が立ちはじめた。尾崎らが主張し、中央公論などの誌上で論じていた東亜協同体論が左翼理論の偽装ではないかというものも出はじめた。事実、憲兵隊筋が尾崎の言論をチェックしはじめたのは一九四〇年頃からだといわれている。

尾崎がゾルゲに情報をわたす場所も、従来二週間か三週間に一度、東京か横浜の料亭かレストランを使い、独ソ戦がはじまってからは毎週月曜日に、そして身辺に監視の目が光るようになってからは、ゾルゲの自宅で行うことが多かった。一九四一年の後半になると、このようなゾルゲとの会合や宮城との接触をかぎつけられたのか、尾崎自身に対する監視の目は日に日にきびしくなっていった。

日米関係が問題になりはじめた一九四〇年、日本の外事警察は特高と協力して、アメリカ帰りの共産主義者のリストをつくって、その行動を内偵するようになったが、これは対米英スパイ活動を防ぐのが目的であった。そのリストの中に北林とも、宮城与徳が入っており、当局の捜査線上にうかんでいた。だが、それまでただ監視の域を出なかった宮城の身辺と交友関係が徹底的に洗われるようになるのは、一九四一年九月、後述の伊藤律の自供によって北林ともが検挙されてからである。

マックス・クラウゼンの発信する電波が警察当局の怪しむところとなったのも、やはりこの一九四〇年頃からであった。ゾルゲらが日本で活動した八年余のうち、この最後の一六ヵ月間、すなわち四〇年半ば以降の送信数がきわ立って多かったためか、その頃から東京上空をとびかう怪電波の存在が気付かれるようになり、その発受信地点の探索が逓信省電波局を中心に行われるようになった。しかしこの努力もみのらず、遂に最後までつきとめることができなかったのである。

以上のように、ゾルゲ、尾崎、宮城らに対して日本官憲が疑惑の目を注ぎ、秘密裡に彼らを監視してはきたが、確証をつかんで彼らを検挙することはできなかった。特にゾルゲにはドイツ大使館が、尾崎には近衛側近という防壁があって、警察当局としてもそう立ち入って調べることもできず、また宮城にしても元アメリカ共産党員というだけではつかまえるわけにはいかなかった。怪電波の正体も結局はわからず、要するにラムゼイ機関は遂に警察に挙げられる決定的な証拠をおさえられることなく、たった一つのミスさえなければ、無事に仕事を終えて解散し、国外へ退去できたかもしれなかった。そのミスとは宮城と左翼運動家とのつながりであった。

ゾルゲは、日本の共産党員をはじめとする左翼運動家たちを仲間には絶対に入れず、尾崎にも彼らと接触することを厳に禁止した。日本の官憲は必ず彼らを次々と狙うことを知っていたからである。その意味で国外とはいえ、アメ

リカの共産党員であった宮城を組織に入れたこと、そして宮城に北林ら昔の仲間から情報をとらせていたことはやはりゾルゲの最大のミスであった。とにかく、ここから破綻をきたしたのである。

ゾルゲらの組織がそのミスをつかれ、彼らのカタストロフをもたらす最重要人物としてここに伊藤律が登場してくる。一九三九年一一月、二度目の検挙で目黒署に留置され、共産党再建運動についてはげしい追求をうけていた伊藤が、当局の心証をよくしたいという考えからか、北林ともを密告したことから組織が次第にバレていったといわれている。伊藤は、北林の姪にあたる青柳キクヨがそのハウス・キーパーをしていたことから、アメリカ帰りの北林を知った。伊藤が「北林はスパイだ」と警察に告げたのは、彼女が共産主義運動を捨てたものと誤解してその仕返しの意味からやったもので、彼女が宮城への情報提供者でゾルゲの組織につながっていることは全く知らなかったのだろうと一般にいわれている。

伊藤は尾崎と同郷で一高の後輩に当り、尾崎の家に足しげく出入りし、特に尾崎が満鉄に移ってからは自分の片腕として論文の代筆をさせるほど可愛がっていた。したがって、伊藤の密告は、結果的には尾崎を裏切ったものといえ、戦後「生きているユダ」といわれたのもこのような事情からである。また伊藤が、北林のことをしゃべった後、仮釈放で出所し、ふたたび満鉄に復帰して尾崎とことさらに親しくし、その頃から満鉄と尾崎に対する特高の監視がきびしくなったことなどから、伊藤は特高のイヌで、組織の存在を知っていたのだという説をなすものもいる。

とにかく、従来ただ元アメリカ共産党員として調査の対象であったにすぎなかった北林に対する当局の捜査がある時点から急激にきびしくなり、遂に一九四一年九月二八日検挙されるに至ったのは、やはり何かがあったにちがいない。それが伊藤律の自供からだというのが通説となっている。この通説は、戦後GHQが、押収したゾルゲ事件関係の書類をもとに、当時の警察、検察当局の関係者から事情を聴取して調べ上げ、本国の反共政策の一環として、米陸軍省の名で発表したいわゆるウィロビー報告にもとづくものであった。だが、果して伊藤が警察で北林の名をあげたのか、またゾルゲ組織の存在を知っていてやったのか、その真相は伊藤の口からきくほかはなかった。昨年九月、中国から突如帰国した伊藤が真相を洩らすのではないかと期待された理由もこのへんにあったのである。

なお、一説によれば、ゾルゲの活躍していたドイツ大使館に出入し、彼とよく顔を合わせた山本権兵衛海軍大将の孫娘山本満喜子がゾルゲを調べるよう警察に密告したといわれているが、これが真実だとしても、ゾルゲ逮捕のきめ手になったものとは思われない。

一九四一年九月二八日郷里和歌山県で逮捕された北林ともは東京に送られ、はげしい追求に会う。彼女は取り調べられた六本木署が、偶然宮城のアジトに近かったため、宮城も検挙されたものと早合点して、不用意に宮城の名を洩らした。そのため一〇月一〇日に宮城が検挙され、その自白にもとづいて、同一五日に尾崎が、一八日にゾルゲ、クラウゼン、ヴーケリッチの三名が相続いて逮捕され、組織は完全に壊滅した。

一九四三年九月、東京地裁はゾルゲと尾崎に死刑、マックス・クラウゼンとヴーケリッチに無期懲役、アンナ・クラウゼンには懲役三年の判決をそれぞれ申しわたした。なお宮城は判決の一カ月前に拘置所内で病死している。また、川合貞吉ら組織に協力したものも次々と検挙され、それぞれ二年から一五年にわたる懲役刑を申しわたされた。西園寺公一は尾崎に情報を洩らしたということで懲役二年（執行猶予三年）の判決をうけ、犬養健は無罪であった。

ゾルゲと尾崎は翌一九四四年一一月七日、ロシア革命記念日に処刑され、ヴーケリッチはその翌年の一月に網走刑務所で獄死した。クラウゼン夫妻ら終戦まで生きのびたものたちは、その年の一〇月全員釈放された。

5　活動に対する評価

ラムゼイ機関の活動の成果がはたして活用されたであろうか。ソ連当局がゾルゲらの送った情報をどの程度利用したかを正確に知ることは不可能であろう。また、ソビエトがゾルゲの極東における活動を他の地域のスパイと比べて、どれほど重要視したかもやはりわからない。ゾルゲらが一九四一年にモスクワへ送った二つの重要な情報のうち、六月の独ソ開戦は一カ月前に予知した見事なスクープであったが、はたしてスターリンがこれをとり上げたかどうか。開戦当初、ドイツ軍の猛進撃の前に赤軍が壊滅に瀕した状況をみると、スターリンはこの情報を信用しなかったという説もある。また、それはソ連国内の政変により、ゾルゲの上司であった赤軍第四本部長が次々とスターリンに粛正されたからだといわれている。

もう一つの重要な情報である日本の南進については、夏の間ゾルゲの情報はまだ決定的なものではなかったが、一〇月に入ると、「日本政府は南進政策をとり、対米英の開戦を用意しているから、当分の間東部シベリアにおける対ソ攻撃は行わない」という報告を行っている。この情報こ

そ、秋の半ばからはじまった西部戦線での予備軍の参加および一二月初旬における極東軍地上兵力の半数の西部移動を可能ならしめ、独ソの攻防に一大転機をもたらす要因となったといわれているものである。

さて、戦後におけるゾルゲらに対する評価はどうであろうか。戦後はじめてゾルゲの名前がソ連の新聞に登場したのは、一九六四年九月四日のことである。そして翌一〇月、ソビエト最高幹部会議がゾルゲ叙勲を決定した。事件当初から、「あの事件はヒトラーの陰謀で、モスクワの関知するところではない」と全くノーコメントであったソ連が、この時期にゾルゲ問題をとり上げたのは、スターリン批判後に開始された一連の名誉回復運動の一環だといわれている。新聞報道以後、相次ぐ伝記や回想録の出版、記念切手の発行、小学校教科書への採用、そしてモスクワにおけるゾルゲ通りの出現といったように、ゾルゲは宇宙飛行士なみの国民的英雄となった。

尾崎に対する評価はまちまちである。戦時中は司法当局の発表どおり、「赤色スパイ」、「売国奴」の汚名をきせられ、日本人であるが故に、祖国に対する悪の度合はゾルゲ以上と一般の人びとには思われた。そして敗戦直後彼に贈られた言葉は、「反戦の愛国者」であり、「鉄のコミュニスト」であった。彼は売国奴なのか愛国者なのか。

尾崎は近衛内閣の政策プランナーとして、また評論家として、東亜協同体や新体制の理論を唱えながら、ひそかにロシア、中国、日本の共産主義共同体を胸に画いていた。日本の北進を防ぎ、中国の革命を助けることがその理想を達成する道で、それにはゾルゲの諜報グループに参加することが最も実践的だと信じて、この仲間に加わったのである。

尾崎の心情と行動は他のメンバーのそれに比べて最も複雑だったように思われる。共産主義社会を理想としながらも、共産党員になる気はなかった。上海時代にあれほど中国共産党の要人に近づきながら、また友人冬野猛夫から入党を勧められ、親友松本慎一の入党をみながら、あえて党籍を持たず、常にシンパの立場を守った。それは、評論家、ジャーナリストあるいは政策決定のブレーンとして社会の広い領域で活躍する方がよいという自分の才能に対する自信といくらかの世俗的な野心および日本共産党の路線やその教条主義的な体質に対する批判があったからではないかといわれている。一方で国際主義者でありながら、他方では日本の現実政治に強い関心を抱く生来の民族主義者としての側面をもつ複雑な共産主義者とみるのが妥当だともいわれている。

だが、尾崎の国際共産主義に対する献身性も見逃すことはできない。これは尾崎に限らず、ヴーケリッチ、宮城あるいは協力者の水野、川合らにも共通したことだが、ゾル

ゲが最初からコミンテルンを離れ、ソ連の赤軍第四本部に所属していたのに、自分らはコミンテルンのために活動しているものと最後まで信じていた。赤軍とコミンテルンの相異に気付かなかったのはうかつだったと批判する人もあるが、これも非合法時代の左翼活動家に共通する世界革命やそのための国際組織に対する信頼感と献身性のあらわれで、ゾルゲが組織の連絡先をはっきりいわず、尾崎らがそれを疑問に思わなかったのも何ら不思議ではないといわれている。

彼らの共産主義社会建設を目的とする理想と情熱が、その実現をめざす国際組織のために、すさまじいまでの献身的活動を続けさせることを可能ならしめたのであろう。そのあらわれとして、彼らが金銭的な報酬をほとんど要求しなかったことが挙げられる。彼らが次々ともたらした秘密情報がソ連政府や赤軍にとって、当時の金で数千万ドルに価するといわれているのに、ゾルゲらが赤軍第四本部から受けとり、組織で使った金額はたった四万ドルであった。この金銭ぬきの献身性があればこそ、八年余にわたって、日本の捜査当局に発見されずに組織活動ができたのである。全員が確信犯といわれたほどの思想的な団結があったからこそ、スパイ史上まれにみる大仕事をやってのけることができたといえようし、またその活動ぶりは、「売国奴」か「愛国者」かということはさておき、やはり見事なものであったといえるのではなかろうか。

なお、ゾルゲの叙勲が決定した翌年の一九六五年、ヴーケリッチはソ連から叙勲をうけており、マックス・クラウゼンも東ドイツとソ連から勲章を授与されて、目下アンナ夫人とともに東ベルリンで安楽に暮しているということである。

《参考文献の紹介》

ゾルゲ事件に関するまとまった文献の出版は、一九六四年のソ連や東欧におけるゾルゲらの名誉回復以降急激に増えてきた。それは、その頃から資料の発掘が盛んになり、関係者の発言が容易に行われるようになったからであろう。現在までに発表された事件の関係文献は、雑誌や新聞の論文・記事まで含めると、汗牛充棟ただならぬといえるほどきわめて多い。その中から、代表的な著作物といわれ、相互に引用されたり、研究書に参考文献としてとり上げられているような単行書で、当館の所蔵するもの三〇数点を簡単に紹介することとした。リストは日本人による著作と外国ものの翻訳書の二つに大別し、発行年順に掲載し

て、末尾に当館の請求記号を付した。この事件についての調査研究や図書館におけるレファレンス・サービスの参考になれば幸である。

日本人による著作

○「愛情はふる星のごとく」　尾崎秀実著　世界評論社　昭和二一年（GK118-33）

夫人英子の編注による尾崎の妻子あての獄中書簡集。処刑直前までの三年間、自分のとった行動、信条、あるいは死を覚悟しての心境などをやさしく英子と娘楊子にあてて書きつづった文章の中に光る愛情が世人の共感をよび、発行当時ベストセラーとなった。この版には英子、宮本百合子および松本慎一の文章が付されている。なお、この書はその後、何度か再版され、いろいろな文庫に入れられているが、収録した書簡数や解説者の顔ぶれはこの版のものと同じではない。

○「公爵近衛文麿」　立野信之著　講談社　昭和二五年（913.6-Ta933k）

ゾルゲ事件を扱った最初の長編小説で、重臣層や近衛側近の事件とのかかわり合いに焦点があてられている。小説とはいえ、近衛と尾崎とのつき合いが事実よりもやや密接にすぎるきらいがある。直木賞候補にまでなったこの作品は、後に「太陽はまた昇る」（913.6-Ta933t）と改題され、六興出版部から再版されている。

○「特高警察秘録」　小林五郎著　生活新社　昭和二七年（915.9-Ko423t）

戦時中警視庁出入の政治記者だった著者が、数十名の特高関係者および取締をうけた側からも詳細な資料を入手して、日本の特高警察の活動を描写したもので、その第七章、約五〇ページを「尾崎・ゾルゲ事件」と題し、主として特高警察の立場からこの事件を描いている。なお、当時の警視総監安倍源基が序文を書いている。

○「愛のすべてを—人間ゾルゲ」　石井花子著　鱒書房　昭和三一年（915.9—I575a）

昭和一〇年、ゾルゲと知り合ってから検挙までの六年間、愛人として生活をともにした著者のゾルゲについての回想録で、ゾルゲの人間的な側面が正直に語られていて、興味深く、この面での貴重な文献といえよう。なお、この書は昭和四二年、勁草書房から「人間ゾルゲ」（915.9—I575n）の書名で再版されている。

○「ゾルゲ事件」　永松浅造著　近代社　昭和三一年
(915.9—N 151 s)
ゾルゲ事件の俗説やゴシップをとりまぜて興味本位に描いた娯楽読物で、研究書としての価値は全くないといわれている。なお、根拠なしと否定しながらもゾルゲ生存説を紹介している。

○「ある叛逆——尾崎秀実の生涯」　風間道太郎著　至誠堂　昭和三四年(289.1—O 975 Ka)

○「尾崎秀実伝」　風間道太郎著　法政大学出版局　昭和四三年(289.1—O 975 Ka)
尾崎の唯一のまとまった伝記といわれるもので、著者は尾崎の一高・東大時代からの友人である。したがって、青春時代の尾崎について、類書のどれもが触れなかった新しい発掘がみられて興味が深い。また尾崎の上申書などから、彼の獄中における転向問題をくわしく論じているが、その解釈については問題があるともいわれている。
なお、後書はタイトルを変えて再版されたもので、更に昭和五一年にその新装補訂版(GK 118—22)が同じ出版社から出されている。

○「現代史の曲り角」　青地晨著　弘文堂　昭和三四年
(210.7—A 618 g)
著者は本書の第七章「ゾルゲ・尾崎スパイ事件」で事件を論評している。尾崎の上申書から、諜報組織の一員となった頃の彼の精神の動揺やその後の複雑な心境を推量している。また獄中書簡は妻子に自分の思想を理解させ、共感させる目的だったのだろうと述べたり、偽装といわれている獄中の転向問題にもふれるなど、尾崎の心情問題を多く扱っている。

○「ゾルゲ事件」　1～4(『現代史資料』(1)～(3)、(24)
みすず書房　昭和三七～四六年　210.7—G29に収録)
第一巻は司法当局の資料「昭和十七年における外事警察概況」と「ゾルゲ事件資料」のほか、ゾルゲの手記と彼に対する検事および予審判事の訊問調書などが、第二巻は尾崎の手記と彼に対する同様な訊問調書などが中心となっており、両巻の巻末にある小尾俊人の詳細な解説「歴史のなかでのゾルゲ事件」は事件の概要を知るのに好適である。第三巻はクラウゼンとヴーケリッチの手記および両者と宮城に対する訊問調書が中心で、付録として事件関係者判決一覧と関係文献目録が掲載されている。第四巻は検挙報告、無電暗号解読訳文などが中心で、巻末には付録として、ゾルゲの雑誌論文一〇点の全訳と著作略目がある。
この四巻は事件関係の最も信用できる資料集といわれるもので、事件に関心を持つものの必読書である。しかし、

供述書や手記の内容をすべて歴史的事実としてうけとることは危険だという人もある。

○「ゾルゲ事件—尾崎秀実の理想と挫折」　尾崎秀樹著　中央公論社　昭和三八年（289.1—O975Os）

尾崎秀実の実弟として、兄の関係したこの事件の究明に戦後苦闘した著者が、ようやくその概要をつかんで世に問うた作品で、ゾルゲ事件を要領よくまとめた代表的な著作の一つといわれている。サブ・タイトルが示すように、尾崎の精神形成過程からはじまって、ゾルゲとのかかわり合い、そして中国問題の専門家、近衛のブレーンとしての名声を上げながら、一方でゾルゲの組織にのめり込んでゆく心境の複雑な動きを解明して、この事件における尾崎の位置づけ、立場などを読者の前にうきぼりにしている。

なお、ゾルゲについての記述が、日本の警察や検事の調書にもとづいているため、多少事実とちがった点があると指摘するソ連の研究家もいる。

○「オットーと呼ばれる日本人」　木下順二著　筑摩書房　昭和三八年（912.6—Ki248o）

ゾルゲらの組織でオットーと呼ばれていた尾崎秀実を主人公とした戯曲で、昭和三七年雑誌「世界」に発表され、同年六月から八月にかけて、劇団民芸によって上演された。作者は、かつて現実にせい一ぱいの生命を生き切った人としての尾崎に関心を持ち、第二次大戦の前夜、ゾルゲに応じて世界を救うという構想を抱くと同時に、祖国である日本を救わないではいられないという彼の切迫した複雑な心境に注目した。

なお、この作品は昭和四八年に同じタイトルで、講談社文庫として同社から再版されている。（Y81—9721）

○「生きているユダ——わが戦後への証言」　尾崎秀樹著　番町書房　昭和四一年（915.9—O975i）

著者は兄が検挙され、処刑されるに至ったのは、ゾルゲの組織の存在を警察に密告したユダがいたからだと知り、戦後台湾から引き揚げて以来、そのユダをさぐり出して、事件の真相を究明しようとつとめた。しかし、そのユダと目される伊藤律が日本共産党の幹部であったため、究明は難渋をきわめ、病身の著者にとって文字どおりの苦闘であった。この過程を描いたのが本書である。

○「死と愛の書」　山崎淑子編著　三一書房　昭和四一年（915.9—Y512s）

ブランコ・ド・ヴーケリッチは事件の首謀者の一人として、無期懲役の宣告をうけ、一九四五年一月網走の刑務所で獄死したが、本書は獄中の彼が、幼児を抱えた妻淑子と

の間に交した書簡集である。淑子はまえがきの中で、「この手紙の中には紛飾のない彼の人間性がよみとれるので、私だけにあてた手紙ではあるが、ゾルゲ事件の歴史的解明のため、関係者の人間を知りたいと望む人びとのために公表したい」と述べている。なお巻末に付記として、当時の幼児、山崎洋がゾルゲ、ヴーケリッチ、クラウゼンに対する戦後の母国における処遇につきくわしく述べている。特にクラウゼン夫妻との会見記はめずらしいものといえよう。

○「ある革命家の回想」　川合貞吉著　新人物往来社　昭和四八年（GB 521—61）

上海時代の尾崎と知り合い、尾崎を通じてゾルゲの組織に加わった著者の自伝的な回想録である。満州事変勃発後、ゾルゲの命令で奉天に出かけて関東軍の動静をさぐったりした著者の活動が中心であるが、上海時代のゾルゲ・グループの諜報活動を知るのに貴重な文献の一つといわれている。なお著者は、日本でも主として尾崎を通じて情報をゾルゲに流し、そのかどで懲役一〇年の判決をうけたが、戦後出獄した。

○「ゾルゲ事件——戦争と日本人・三つの記録」　牧野吉晴著　新人物往来社　昭和四九年（KH 335—10）

戦後の一時期、家庭・恋愛小説の花形作家であったこの人にはめずらしい著作であるが、戦時中、水野成夫との共通の友人として尾崎と知り合い、一しょに講演旅行などして世話になったことが、彼にこの書を書かせた動機となった。小説家のものだけに他の事件関係書に比べて心情的であり、主として川合貞吉から材料を得たため、尾崎の民族主義者としての側面が強く押し出されているが、そこに著者自身が共感を覚えたのだろうといわれている。

○「ゾルゲ事件獄中記」　川合貞吉著　新人物往来社　昭和五〇年（GB 521—105）

従来のゾルゲ事件について書かれた資料には、関係者の獄中の情況をうかがえるものが皆無に近かったのにかんがみ、著者が自分の体験にもとづき、警察の取調べ、拘置所生活、爆撃下の刑務所内での人間模様といった、戦時中の思想犯の獄中生活をつづったものである。中には著者がかいま見たゾルゲ、尾崎の獄中の様子も描かれている。

前記「ある革命家の回想」と姉妹編をなすもので、前者は著者の上海時代から一九四一年の逮捕寸前までの活動を、この書は逮捕から戦後の釈放までの体験と出獄後の日本共産党の姿などを描いている。

○「ゾルゲ事件と特高——ある被害者の手記——」　海江

田久孝著・刊　昭和五〇年（GB 521—123）

著者は尾崎の満鉄嘱託時代の同僚で、尾崎検挙の直後に留置され、峻烈な取調べをうけたが、結局、尾崎に意識的に情報を流したものではないことがわかり釈放された。彼に対する訊問、取調べがすべて尾崎との関係をつかれているため、この書には取調べの過程を通じて満鉄時代の尾崎が描かれている。しかし著者には、尾崎に対する恨みの気持は全くなく、むしろ自分の体験から、言語に絶する拷問による尾崎の自供は信憑性がうすく、彼の罪は極刑をうけるほどであったかどうかと尾崎に同情的であり、戦前の特高警察や裁判所のやり方をきびしく批判している。

○「真相ゾルゲ事件」　大橋秀雄著・刊　昭和五二年（GB 521—146）

著者は当時警視庁外事課に属してゾルゲ検挙に参加し、取調主任として約五ヵ月間、東京拘置所でゾルゲの取調べを担当、その訊問調書を作成した人で、事件の内容を正しく伝えるとともに、ゾルゲらの活動を世間に紹介するという彼との約束を守るために執筆し、自分で本書を出版した。ゾルゲの取調べの内容については、当然のことながら、やはりこの人と検事局で担当した吉河光貞検事の二人が最もくわしいといわれている。

○「ゾルゲの二・二六事件」　斎藤道一著　田畑書店　昭和五二年（GB 521—139）

タイトルのようにゾルゲらラムゼイ機関と二・二六事件の直接のかかわり合いだけを追求しようとしたものではなく、この現代史上重要な二つの事件を交叉させ、その背後にある当時の世界史総体の軌跡を追うことにより、両事件をさらに深く掘り下げようとくわだてたものである。著者はこの書に小説の手法を随所に導入しているが、いわゆる歴史小説のように筆者の恣意的な創作や歪曲はないことわっている。なお、エピローグにはゾルゲの活動の概要が、あとがきには両事件の参考文献がのせられている。

○「越境者たち——ゾルゲ事件の人びと」　尾崎秀樹著　文芸春秋　昭和五十二年（GB 521—142）

ゾルゲ事件を扱ったほとんどの書がゾルゲと尾崎を中心にしているが、本書は尾崎に次ぐ事件の重要メンバー宮城与徳に焦点をあてている。尾崎の実弟で、兄の関係した事件の究明に戦後の三十年を費した著者は「宮城はゾルゲや尾崎にくらべれば、ごく一般的な人間だったかもしれない。だからこそまた多く悩み、内心のたたかいを経たはずである。私はその宮城の生と死をとおして、人間の誠実さと政治の非情さを描きたかった」とあとがきで述べている。

本書は宮城を中心に事件を扱っているため、彼のアメリカ共産党時代や彼に情報を提供した人びとのことが他の書に比べてくわしく描かれている。また、この書においても、ゾルゲ組織の存在を知っていて警察に密告したのではないかという、伊藤律に対する著者の疑惑の念は強い。

○「回想の尾崎秀実」　尾崎秀樹編　勁草書房　昭和五四年（GK 118—35）

かつての尾崎の友人、同僚、遺族らの回想集で、第一部は尾崎の思想と行動を歴史的に評価しようという論稿を、第二部は彼の広い交友関係を裏づける回想を、そして第三部は遺族の追想を収めている。

巻末の文献目録は、昭和一七年から五四年に至る間の、尾崎秀実に関する単行本と雑誌、新聞にのった論文など約三〇〇点を年次別にリスト・アップしたもので、尾崎と事件を調べるのに便利である。

○「ゾルゲ事件」　編集・解説　勝部真長・寺谷弘壬（『現代のエスプリ』　一四〇号　至文堂　昭和五四年　Z 23—26 に特集）

編者らゾルゲ事件を研究しているグループが、事件から四〇年近くを経た今日、なお日本での評価の定まっていないゾルゲ、尾崎らの活動について再検討すべきだと考えて、この特集を試みたという。事件の関係者、内外の研究者の著作の抜すいや新たな論文を集めたもので、随所に解説を加えて読者の理解を助けている。なお戦時中のフランス・アバス通信社の東京支局長ロベール・ギランの「滞日特派員半世紀の秘話」は、ゾルゲや同僚ヴーケリッチの当時の姿を生き生きと伝えるものとして印象に残る。

○「伊藤律の証言——その時代と謎の軌跡」　川口信行・山本博著　朝日新聞社　昭和五十六年（A 56—Z—358）

昨年九月突如中国から帰国した伊藤律は、彼がかかわった戦前戦後の諸事件について、その謎を解くような何らかの発言があるのではないかと期待された。

本書は朝日新聞がスクープした彼の証言を骨子として、それら事件の解説や関係者の証言などを収めたもので、ゾルゲ事件に関しては、全十二章のうち、四章七十余ページを費している。ゾルゲら逮捕のきっかけとなった北林ともについては、ゾルゲらとの関係は知らず、ただアメリカ帰りの共産党員と告げたにすぎないと述べ、また満鉄復職後、尾崎らの情報を警察に流したという説を否定している伊藤の証言に目新しい発掘はない。ただゾルゲ事件を伊藤の密告という観点から取扱ったところに特色のある書といえよう。

○「暗い夜の記念——戦中日暦」　風間道太郎著　未来社　昭和五六年（GB 511—108）

本書は尾崎秀実の一高・東大時代の友人で、前出の「ある叛逆」・「尾崎秀実伝」の著者が、戦時中の生活の記録、日記、回想などをまとめたものであるが、「人間尾崎秀実」と題するその第三章で、この友人の人間性を回想するとともに、ゾルゲ事件の意味するものを再び世に問うている。しかし内容としては、前記の著書と大差はない。

翻訳書

○「赤色スパイ団の全貌」　C・A・ウィロビー著　福田太郎訳　東西南北社　昭和二八年（391.6—cW 73 s—H）

戦後マッカーサー司令部情報部（G 2）の部長であったウィロビー少将が、ワシントンの命令で行ったゾルゲ事件の調査報告書、Shanghai Conspiracy の抄訳で、俗にウィロビー報告といわれるものである。原題が示すように、ゾルゲの上海での活動に重点がおかれてくわしいが、日本で尾崎とともに検挙されるきっかけが伊藤律の自供によるということをはじめて発表したのがこの報告だといわれている。

なお、マッカーサーの序文が示すように、発表当時の米極東政策の一環としての反共心理作戦に役立たせようという意図が露骨に出ているという批判がある。

○「スパイ・ゾルゲ」　ハンス・オットー・マイスナー著　大木担訳　実業之日本社　昭和三三年（943—cM 51 s—O）

戦時中、在日ドイツ大使館の情報官としてゾルゲと親交のあった著者が、ゾルゲをモデルとして書きおろした小説である。「ゾルゲの自己以外の権威にはげしく反発する性格からみて、彼の行動は共産主義や組織のためでなく、あくまで単独でやってのけた『無償の行為』である」と著者は確信している。

しかし、虚構であり、資料的価値はあまりないといわれている。

○「同志ゾルゲ——或る諜報部員の記録」　イ・デメンチェワ、エヌ・アガヤンツ、イェ・ヤコブレフ著　刀江書院編集部訳　刀江書院　昭和四〇年（289.3—cS 71 Dd—T）

一九六四年ソ連で名誉を回復されたゾルゲについて、はじめて同国で書かれた小冊子「同志ゾルゲ」の全訳である。ソビエツカヤ・ロシヤ紙の特派員の著者たちが、モス

クワに残っている記録や数十人に上る関係者の回想にもとづいて、ゾルゲの生い立ちから、日本における諜報活動までを描き、彼の仕事の歴史的意義を伝えようとしたものである。なお、「それまでのゾルゲに関する西欧のセンセーショナルなたわ言に対抗して、彼やその友人の真の姿を再現しようとした」と著者は「はしがき」で述べている。

○「尾崎・ゾルゲ事件——その政治学的研究」　チャルマーズ・ジョンソン著　萩原実訳　弘文堂　昭和四一年
(312.1—cJ 66 o—H)

本書は一九六四年、ソ連におけるゾルゲの名誉回復の二カ月前に、アメリカのスタンフォード大学出版部から発行されたものの翻訳で、著者は当時カリフォルニア大学助教授であった。その三年前に中国共産党の研究で来日し、尾崎秀実の「現代支那論」を読んだのが、本書を書くきっかけになったという。政治学者らしいきめの細かさで、ゾルゲ事件の全貌を究明しようと試みているが、特に尾崎の思想と行動を深く掘り下げ、「尾崎は共産主義者、スパイ、民族主義者、国際主義者の一人四役を兼ねた殉教者である」と結んでいる。

はじめて外国人によって書かれた本格的な尾崎・ゾルゲ事件の分析だといわれている。

○「ゾルゲ追跡——リヒアルト・ゾルゲの時代と生涯」
F・W・ディーキン、G・R・ストーリィ著　河合秀和訳　筑摩書房　昭和四三年(391.6—cD 27 s—K)

著者はともにオックスフォード大学の国際問題研究施設セント・アントニーズ・カレッジに属する国際政治学者で、特にストーリィは戦前小樽高商の講師をつとめ、ある意味でゾルゲと共通の体験を持った人である。そのためか、事件の舞台となる当時の日本の情勢やゾルゲら外国人に対する日本人の心理などがくわしく描かれている。またゾルゲの供述書からの引用で、ゾルゲ・グループが八年にわたって無事に活動を続けられた理由として、諜報活動に全然適していない女性を使わなかったこととメンバーがみな立派な職業を持ち、社会的地位と信用を得ていたこととを挙げている。

原書出版当時のガーディアン紙の書評で、「おそらくこの書は、ゾルゲの非凡な業績にとって、ソ連の英雄勲章にもまさる記念碑となるであろう」とほめられている。

○「ゾルゲ諜報秘録」　マーダー、シュフリック、ペーネルト共著　植田敏郎訳　朝日新聞社　昭和四二年(391.6—cM 18 s—U)

一九六六年、東ドイツで「ゾルゲ東京より無電す」という題で発刊された原書の翻訳である。ジャーナリストであ

る著者マーダーらは、クラウゼン夫妻をはじめ現存するほとんど世界中のゾルゲ事件関係者から、手紙またはインタビューによって情報を集めたので、本書は類書にない新しい事実を含み、またゾルゲやクラウゼンらのドイツとソ連での生活について、彼らの獄中手記や裁判所の調べ以上にくわしい。

訳者はゾルゲ事件の裁判でクラウゼン夫妻の通訳を担当した人で、ゾルゲらが世界諜報史に残る成果を上げたことは事実だが、本書は彼らをもち上げすぎて、やや公式主義になったと述べている。

○「愛に生きたゾルゲの生涯」　セルゲイ・ゴリヤコフ、ウラジーミル・ポニゾフスキー共著　池田隆蔵訳　東火社　昭和四二年（983—cG 622 a—1）

「リヒアルト・ゾルゲ」と題する実録小説が一九六五年、ソ連の週刊誌『アガニョーク』に連載されたが、本書はその翻訳で、開業医の訳者が、月刊文芸誌『東火』に連載したものを一冊にまとめたものである。なお訳者は、原題を標記のように変えたのは、他の類書と間違われないためであり、また愛とは祖国愛、人類愛、妻カーチャに対する愛の総称だとことわっている。訳注を多く使って当時の情勢を解説している。

○「ゾルゲ・尾崎事件」　ブトケヴィチ著　中山一郎訳　青木書店　昭和四五年（AZ 717—2）

一九六九年にモスクワで出版された「ゾルゲ事件——取調べと裁判」の全訳で、原著者はソ連科学アカデミーに所属する現代日本研究家である。「現代史資料」をはじめとする日本の数多くの文献を入念に読んでおり、それらの引用が多く、また注による解説も正確だといわれている。最後にゾルゲ・グループの、当時のコミュニストとしての比類のない献身性を強調している。

なお、ソ連における以前の研究書や伝記ではフリードリッヒ・ゾルゲがリヒアルト・ゾルゲの祖父だと書かれてきたが、この原書ではじめて大叔父と訂正された。

○「実録ゾルゲ物語」　エス・ゴリヤコフ、ウエ・ポニゾフスキー著　秋山勝弘訳　刀江書院　昭和四五年（KP 227—4）

本書は、前記「愛に生きたゾルゲの生涯」の頃で述べた、『アガニョーク』に連載された「リヒアルト・ゾルゲ」がその後加筆訂正されて単行本となったものの翻訳である。したがって、内容は池田訳と大差はない。ただ内容と登場人物の名をぬき出した中見出しをつけ加えたり、さし絵を入れたり、読みやすいような配慮がなされている。

実録小説なので、諜報活動の内容や事件の進展は事実の

再現であろうが、個々の会話や情景描写はほとんど創作である。

○「リヒアルト・ゾルゲ――悲劇の諜報員」　マリア・コレスニコワ、ミハイル・コレスニコフ共著　中山一郎訳　朝日新聞社　昭和四八年（GK 489―4）

本書は一九七一年、世界偉人伝叢書の一つとして出版された著者夫妻の共著「リヒアルト・ゾルゲ」（本書の第一部・第二部）と、本書の第三部を構成する、同じ年に出版された「ゾルゲの論文・通信・書評」の二つの原典を合わせて翻訳したものである。著者は、作家、文学評論家あるいはジャーナリストとして、現代ソ連の文壇で活躍している。

原書はゾルゲを知る人たちの談話とユニークなソ連にしかない豊富な資料を駆使しているので、事実と人物の記述は大筋において信用に値するが、日本人についてのエピソード的な事柄には思い違いと思われる点が若干あるので、著者に無断で訂正したと訳者はことわっている。なお、伊藤律のことについて全く触れていないのには疑問が残る。

第三部では、ゾルゲの書いた論文や記事三五点が翻訳紹介されているが、「現代史資料㉔」に収録されたものとともに、ゾルゲの文章に接するのに欠かせない資料である。訳者のつけた巻末のゾルゲ年譜とゾルゲ事件関係書案内も便利である。

○『ゾルゲ』世界を変えた男」　セルゲイ・ゴリヤコフ、ウラジミール・パニゾフスキー共著　寺谷弘壬監訳　パシィフィカ　昭和五五年（AR 5―351―6）

本書は一九七六年モスクワで出版された「ラムゼイの声」のほぼ全訳で、著者ゴリヤコフはジャーナリストで国際問題の専門家、パニゾフスキーは作家である。

ゾルゲ事件にはまだまだ謎の部分があり、また彼らの諜報活動が当時の国際情勢にどの程度影響を与えたかなど疑問も多い。本書はこれらの解明に多少とも役立つのではないかと訳者は「あとがき」で述べている。また、従来使われなかった新しいデータ、たとえば妻への手紙などをとり入れて、諜報活動の面だけでなく、人間としてのゾルゲの描写にも成功しているといえよう。

本文の前に事件のあらましをのせて読者の理解を助け、文章も読み易い本書であるが、朝日新聞の書評でも指摘されたように、日本の役職名の常識的な間違い（たとえば軍需大臣を軍事産業大臣、参謀総長を参謀本部長と翻訳）がいくつか出てくるのは惜しまれる。

○「ゾルゲの時代」　ロベール・ギラン著　三保元訳　中央公論社　昭和五五年（GB 521―225）

著者は戦前からの日本通のフランス人記者で、一九三八年アバス通信社（現ＡＦＰ）の東京支局長として来日、ゾルゲとは外国特派員仲間として、ヴーケリッチとは同じ通信社の上司として、彼らが検挙されるまで、もちろん赤軍の諜報組織のメンバーなどとは知らずにつき合った人である。

本書はヴーケリッチを中心とし、電通ビルにたむろする外国特派員やアンリ大使らフランス外交官の動きなどを追うことによって、ゾルゲ事件の背景となっている日米戦勃発前の東京の空気と国際情勢を描き出している。とにかく、ヴーケリッチとは毎日顔を合わせ、時には明らかにゾルゲから出ている情報を貰って本国に通信したこともある人の著書だけに、ユニークでかつ描写に迫力のあるゾルゲ事件の記録といえる。また著者は、「ゾルゲは優れた記者であると同時に優れたスパイだった。彼は偽記者ではなく、本当の記者だった」と述べている。

本書は日本の読者のために書きおろした「回想のゾルゲ事件」の翻訳で、近くややフランス人向けに書き直したものが、「モスクワを救ったスパイたち」の題名で刊行される予定である。

（一九八一・一〇・三一　たなか・あずさ　連絡部司書監）